

手織機の復元

2005年の5月に鎌倉市在住のMさんから次のようなメールが届きました。「以前織物をしていて入手した島根・鳥取の古い手織機を小金井市桜町の実家の倉庫に置いてある。繊維博物館で役立ててもらえないだろうか」というものです。この島根・鳥取の古い手織機の模型が重松氏の縮尺模型に含まれていました。現在の繊維博物館には手織機を置くスペースがないため、2台は小金井市文化財センターに寄贈してもらうことになりました。

小金井市教育委員会では文化財センターにある手織機を使って「はた織り」の体験教室を開く計画があります。文化財センターの職員多田さんは手織機の復元を研究していましたので、繊維博物館では重松氏の模型や調査したときの製図などをもとに修復に協力を依頼しました。

また繊維博物館友の会サークルの織物研究会を終了した小金井市民の会員も協力しました。



小金井市文化財センター

鳥取弓ヶ浜半島地方の高機

弓浜緋：鳥取県西部で江戸時代前期に綿花の栽培、中期には藍の栽培が始まり、「浜緋」と呼ばれる絵緋が農家で織られていた。全盛期は明治中期まで。その後衰退し、現在は伝統工芸として技術・技法が継承されている。（鳥取県産業技術センター資料より）

明治20年頃、久留米から高機を導入したといわれる。「吊り箆おさ」の支柱がほぼ直立している点が特徴である。（重松氏の解説による）



寄贈された高機



修復中の高機



縮尺模型（モデル機：鳥取県立博物館）

島根県安来地方の高機

広瀬絣：藍染の広瀬絣はに文政年間（1818～29）に隣の伯耆国（鳥取県）米子から絣の技法が伝わったのが始まり。幕末から明治期が最盛期。

安来織：明治30年（1897年）生まれの遠藤小間野は藍色のたて糸、白いよこ糸で模様を織り出す絵絣を考案。遠藤家と親交のあった民芸運動家の河井寛次郎が安来織と命名した。

「吊り^{おき}箴」の腕木が水平である点が弓浜とは異なる。（重松氏の解説による）



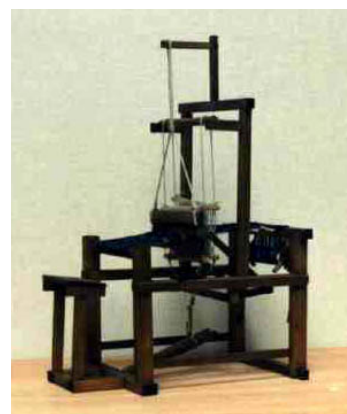
安来織



寄贈された高機



修復中の高機



縮尺模型（モデル機：安来市遠藤千恵子工房）

修復にあたって

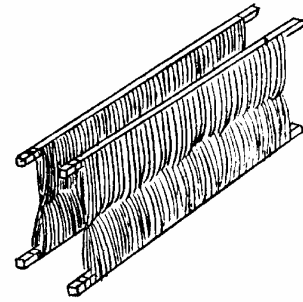
実際に使われていた手織機はすべて昔の人の手作りで、規格がある訳でなく、織る人が自分で工夫していろいろな改良を加えたりしてあります。模型と完全に同じように復元するのはむずかしいことが分かりましたが、糸綜紬や竹箴など、できるだけ往時のおもかげが残るようにしました。

そうこう おさ
糸綜統と竹箴 (p.13 参照)

1. 糸綜統

糸綜統とは、あらかじめ布幅に応じて用意されたたて糸を上下に分けて、その間をよこ糸が通せるようにするための織機の重要な部品です。最低2枚の糸綜統があれば布は織り上がりますが、複雑な組織をもつ織物には何枚もの糸綜統が必要になります。

手織機では絹や綿の糸を使った糸綜統が使われてきましたが、現在ではほとんど使われなくなりました。



19世紀初めに栃木県黒羽城主、大関増業が編纂した止戈樞要しかさうようのうち機織彙編(1826年ごろ)に描かれた糸綜統

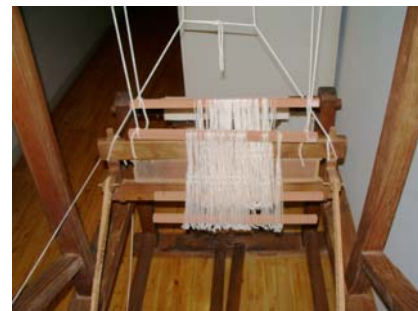


高機の糸綜統 (絹製)



腰機の糸綜統 (綿製)

(繊維博物館所蔵)



修復した高機の糸綜統

2. 箴

箴は織機の部品の一つで、箴羽おきはと呼ばれる多数の細長い薄片を櫛の歯のようにつらね、それを長方形の枠で固定したものです。箴羽の間にたて糸を数本ずつ通し、櫛ですくようにしてたて糸を整えます。

また杼ひで通したばかりのよこ糸を、箴を使って引き寄せすることで、織目を均一に詰めていきます。手織りの場合、このときに「トントン」というはたおり独特の音がします。

箴は手織機では竹が使われていましたが、次第に金属製に変わり、現在では日本最後の箴羽生産地である岐阜県瑞穂市祖父江地方でも後継者がいなくなりました。

糸にやさしい竹箴の良さを残そうと各地で保存運動が起こっています。

